HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書誌雑感 : 随筆
Author(s)	柁原, 宏
Citation	タクサ : 日本動物分類学会誌, 37, 46-49
Issue Date	2014-08-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67774
Type	article
File Information	Taxa37_46-49.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

随　筆

書誌雑感

「先生，どうしてこの単語の頭文字は大文字でこれは小文字なんですか？」と，これまで論文指導してきた院生諸君の幾人かから尋ねられたことがある．論文の終わりの引用文献リストにおけるドイツ語で書かれた論文タイトル中の単語に関する質問である．自分が教養部の学生だった頃の第二外国語の主流は断然ドイツ語であり，その他にフランス語や中国語がちらほら，ロシア語を履修する学生の割合は――その頃まで長く続いた東西冷戦のせいか，難解な言語という先入観からか，あるいは単に教官の数の問題か――かなり低かったと記憶している．しかし，筆者の勤務する大学では最近スペイン語や韓国語といったように第二外国語の選択肢の幅が広がり，その結果としてドイツ語をよく知らない学生の相対的割合は増えてきたのかも知れない．筆者の第二外国語はフランス語だったが，後に専門分類群に選んだ紐形動物に関する文献は圧倒的に独文が多く，流れに棹差すべきだったと思えど後悔先に立たず，院生時代デア・デス・デム・デン…と泣きながらドイツ語を勉強しなければならなかった．――そんなことに想いを馳せつつ，件の院生諸氏には「それはね,」といって，ドイツ語の名詞は，それが文頭にあろうと文中にあろうと，そしてそれが固有名詞であっても普通名詞であっても，常に大文字で表される，という彼の言語における正書法の規則をその都度説明してきた．ことほど左様，論文の引用文献のスタイルには，学術雑誌の投稿規定に明文化されていないルールがたくさんあるのだ，ということは，近年巷間に溢れている所謂「論文の書き方マニュアル」的書籍には必ずと言っていいほど書かれている．が，そのルールはあまりに広範に亘る上，個々の学術雑誌には固有の投稿規定（＋暗黙のルール）がそれぞれに有るのであるから，そもそも一冊の「マニュアル本」で完全に網羅できる訳がない．考えてみると実に恐ろしいことではあるが，論文を物する人々は皆あたかも全貌の見えない怪物と格闘し続けるかのように運命づけられているのかも知れない．本稿では筆者が，院生の指導教員，本会英文誌の編集者，そして一著者として経験してきた事例の中から，そのような「怪物」=「書かれていない暗黙のルール」のいくつかに関して思いつくまま述べてみたい．「思いつくまま」とはいかにも無責任なようだが，所詮それを知悉し，体系的に解説し尽くすことなど何人にとっても不可能事なのかも知れず，この小文が幾ばくかなりとも未来の論文著者となるどなたかのお役に立てれば，というのが筆者のささやかな願いである．

「アングロ・サクソンの書名は，冠詞，小詞〔代名詞，接続詞等〕，前置詞，副詞を除き，名詞，形容詞，動詞は大文字で書かれることになっている」（『論文作法』ウンベルト・エコ【著】谷口勇【訳】而立書房1991: 79頁）という規則はそのような「暗黙のルール」の1つかもしれない．そんなことは高校・大学の英語の授業で習った覚えがないからである．あるいは単に忘れただけかもしれないが，そもそも長めの書名（ただし全部大文字で表記されていないことが条件）を幾つか見ればこのルールは簡単に演繹できると思う．本会英文誌の場合は論文の表題にもこのルールが適用されるが，投稿規定を一読すれば瞭然，引用文献リスト中においてはそれは単行本の書名と雑誌タイトルだけに適用され，引用した論文のタイトルには適用されない．なので，ウェブ上あるいはPDFなどからコピーしてきた論文タイトルを引用文献リストにそのままペーストすると，場合によっては不必要な箇所が大文字のまま残ることになり，指導教員はここでもまた「これはね,」といって院生に言を尽くすことになる．話は脇に逸れるが，ウェブ上からのコピー・ペーストといえば，例えばSánchezやMüllerといった人名中の「á」や「ü」のアクセント・ウムラウトはウェブ上のリソースでは欠落して「a」や「u」になっていることがままあるので気を付けたい．ところで，「アングロ・サクソン」ではない（つまり英語ではな

い），例えばフランス語やイタリア語といったロマンス諸語で書かれた書名や雑誌タイトルを引用文献にリストする場合はどうするのか？元の言語の慣習を尊重するならば書名中の名詞・動詞・形容詞の頭文字は小文字になろうが，「英文」誌の引用文献リストなのだから，という理屈を通すとそれらは大文字で表されるべき，ということになる．本会英文誌は基本的に後者の論理を援用している（はずである）が，他の雑誌（例えば少なくとも過去一時期のJournal of Natural History誌）には前者のスタイルを採用しているものもある．従って，ドイツの『応用動物学雑誌』Zeitschrift für angewandte Zoologie誌の雑誌タイトル中の形容詞「angewandte」（anwenden「応用する」という動詞の過去分詞で，英語でいうところのapplied；辞書に載っている格変化語尾なしの形はangewandt）の頭文字はSpecies Diversity誌掲載論文の引用文献リスト中ではAngewandteと大文字で表記されるが，JNH誌では小文字となる（そもそも大文字だの小文字だのどっちでもいいことに拘泥し過ぎているのかも知れませんが，どちらかに統一したスタイルを維持するのが編集という仕事の基本的姿勢の一つである訳です）．

斯く言う筆者も駆け出しの頃は自分の論文の引用文献を作成するにあたり，先行論文の引用文献リスト中の書誌事項を（投稿先の雑誌のスタイルに合わせながら，ではあるが）そのまま書き写すことも多かったと記憶している．「これではイカンのかもな」と思い始めたきっかけの一つは，友人のロシア人研究者から共著論文執筆中にメールで教えてもらった，昔のロシア語文献における著者名表記のルールである．ロシア語の名詞には主格，生格（属格），与格，対格，造格，前置格の6つの格がある．生格はおもに「〜の」という所有の意味を表し，主格が子音で終わる男性名詞の場合は語尾に「-a」を付すことで形成される．件の友人曰く，往時のロシア語の文献においては著者名を生格の形で表すという慣習があったらしい（ちなみに当該論文の出版年はロシア革命前夜の1912年）．問題は，そのようにして形成された生格の男性名詞（つまり男性の著者名）が主格の女性名詞（つまり女性の人名）と見た目上区別できない点である．著者が専門とする海産無脊椎動物学の分野に限って言えば，今でこそHansson (1997) による『BEMON』(http://www.tmbl.gu.se/libdb/taxon/personetymol/index.htm) のような優れたインターネットリソースによって昔日の博物学者たちの（性別を含めた）素姓をある程度知ることが出来るが，引用文献リストに男性の著者名を女性と勘違いしている論文を見てそれを無批判に引き写す過ちを指摘してくれたロシアの友人には感謝している．単に著者名の表記を間違えるだけならばともかく，その著者に献名した学名の綴りはもはや修正のしようがなく，出来ればそのような間違いは避けたいものだ，と思ったものである（命名者の名誉のため敢えて実例は記さないが，そのような種小名が実際にある）．

ロシア語はa, б, в, г, дのようなキリル文字によって綴られている．英語で論文を書く場合それらをa, b, v, g, dのようなラテン文字に変換する必要がある．このように，特定の言語を記した文字表記を別の文字体系に移すことを翻字transliterationという．日本語をラテン文字に翻字するコードにヘボン式や訓令式といった複数のコードが存在するように，キリル文字をラテン文字に翻字するコードも複数存在する．例えば「ィヤー」という音価を持つ「я」の文字はScholarlyというコードではjaと翻字されるが，ALA-LCではia, British Standardではyaと翻字される．様々なコードで翻字された複数の異なる論文中の引用文献リストからロシア語文献タイトルを無批判に引用して自分の論文の引用文献リストを書き上げると，そこにはコードのチャンポンが生じることになる．ひどい場合には同じ語や人名が別のラテン文字で表記されることにもなりかねないことは上の「я」の例からも明らかであろう．このような場合，面倒でも原典のキリル文字ロシア語タイトルに直接当たり，自分が書く原稿は1種類のコードで統一することが推奨される，ということを本会英文誌の編集を担当している折に学んだ．厄介なのは，ロシア人著者は自分の名前を特定のやり方で翻字することを好む場合があり，それは（自分が選んだコードに優先して）尊重されるべきである，という事である．同様のことは邦人研究者の名前の表記にも当てはまる．例えば，蔓脚類の分類学者として知られる京都大学瀬戸臨海実験所元所長・内海富士夫（うちのみ・ふじお）博士の著作を英文で引用する際の著者名表記はUchinomi, F.ではなくUtinomi, H.としなくてはならない．博士は1942年御結婚により改姓されたが，ご発表になられた

欧文論文中一貫してご自身のお名前を訓令式で綴られたからである（旧姓は弘〔ひろ〕なのでHiro, H.）．

ロシア語と同様，ラテン語も6つの格を持っている．ロシア語の著者名の格に関する慣習を友人から教えてもらってハタと思い当たったのは，ラテン語で書かれた西欧の古書の場合でも同様の過ちを犯していなかったか，という事であったのだが，而してその予感は的中していた．本会英文誌を始めとして多くの学術雑誌では単行本を引用文献リストに記す際，著者名，出版年，書名の他，出版者と出版地（そしてページ数）についても記述するスタイルを採用している．書籍のタイトルページや奥付を見てこれらの情報を適切に抽出するには若干の（特に古書の場合それ相当の）知識と経験を要すると思う．その昔は出版者publisherが印刷も行っていたためpublisher ＝ printerだったようであるが，現代出版業界において多くの場合それらは別々である．引用文献リストに記すのはあくまでも出版者（現代ではほぼ出版社に同義）であり，印刷者（あるいは印刷社）printerではない．グローバル化の昨今，大手の出版社はロンドン，ニューヨーク，トロント，…のように国際的に複数の拠点をもつ場合があるが，2つまでは具体的に記し，3つ以上の場合は最初の1つだけを記せばよいようである．ところで，例えば動物命名法の出発点である『自然の体系』第10版はCarolus Linnaeusが著わし，Laurentius Salviusという出版者によってHolmia（現在のストックホルムStockholmの古ラテン名）において出版された書籍である．そのタイトルページにはこれらの語は属格であるCaroli Linnaei, Laurentii Salvii, Holmiaeという形で表記されている．リンネ「の」，サルウィウス「の」，ストックホルム「の」書物である，という意味が属格によって表されているのであろう．引用文献に同書がリストされているような論文はGoogle Scholarなどで簡単に検索することが出来るが，さすがに著者名をLinnaeiと属格で表記しているものは見かけないにしても，出版者と出版地をSalvii, Holmiaeと記しているものは結構な頻度で見受けられる．何を隠そう筆者も以前同様の轍を踏んでいて汗顔の至りなのだが，「これは（意味的に）おかしなことなのかもしれないな」と気づいて以降，このようなラテン語の古書を引用文献にリストする場合，出版者はラテン語の主格で，出版地は英名で，それぞれ表記するように心がけている．

著者の名前の扱いについてもSpecies Diversity誌の編集業務に携わっている間に多くのことを学んだ．以下に『CBDマニュアル』136頁の表7.1を改変したものを抜粋してみる（ちなみにこの表の日本人名に関する記述は間違っているため下には書いていない）．

■ポルトガルとスペインを除く西欧の人名

○一語の姓の場合：名前の最後の要素

例） Rosemary BirdはBird, R.に
Jeff DavidsonはDavidson, J.に

○複数語（ハイフンで連結されているかどうかを問わない）

例） Henriette Carson-PetersはCarson-Peters, H.に
Marck Bonham CarterはBonham Carter, M.に

○接頭辞を含む複数語（生国不詳の場合）

▲次の接頭辞は姓に含める：am, de, del, della, delle, des, di, du, l', la, las, le, les, il, los, ver, vom, zum, zur

例） Roberto di GiacomoはDi Giacomo, R.に
Aja ver BovenはVer Boven, A.に

▲次の接頭辞は姓に含めない：af, den, op de, ten ter, van, van den, van der, von, von der

例） Ludwig van BeethovenはBeethoven, L. vanに
Leo op de BeekはBeek, L. op deに

○接頭辞を含む複数語（生国が分かっている場合）

▲英語圏とイタリア語圏：接頭辞を含める

▲フランス：「de」を除き，接頭辞を含める

例） Simone de BeauvoirはBeauvoir, S. deに
Marie la SalleはLa Salle, M.に

▲ドイツ・オーストリア・オランダ：生国不詳の場合と同じ

▲デンマーク・ノルウェー・スウェーデン：ドイツ語由来の接頭辞（von, der, af）以外は接頭辞も名に含める

○ハンガリー人名：姓が名の前に置かれる

例） Bartók BélaはBartók, B.に

■ポルトガル人名
○姓の最後の要素
例） Ovidio Saraiva de Carvalho e Silva は Silva, O. S. de C. e に
○最後の要素が家族関係を表す語（Filho〔息子〕, Neto〔孫〕, Sobrinho〔甥〕）の場合：終わりから2つ目の要素も含める
例） Victor Vidal Neto は Vidal Neto, V. に
○姓に接頭辞が付く場合：接頭辞は含めない
例） Maria Anna da Fonseca は Fonseca, M. A. da に
■スペイン人名
○父の名に続けて母の婚前の名からなる姓（既婚女性の場合，接頭辞 de に続いて夫の名がつくこともある）の場合，それら全ての要素を用いる
例） Juan Perez y Fernandez は Perez y Fernandez, J. に
○冠詞 la, el, las los を伴う一語の姓の場合，冠詞の頭文字を大文字にして含める
例） Manuel las Heras は Las Heras, M. に
○前置詞あるいは前置詞＋冠詞を伴う姓の場合，それらは含めない
例） José de la Vega は Vega, J. de la に
■インド人名
○現代人名は最後の要素;「Sen」や「Das」が付く場合それも姓に含める
例） Bimal Sen Gupta は Sen Gupta, B. に
■インドネシア人名
○多くのインドネシア人名は1語からなる
例） Sukarno
■ミャンマー人名
○多くのミャンマー人名は1語からなる；敬称「U」が人名の前に置かれる場合，それを維持する
例） U Thant は Thant, U. に
■中国・韓国人名
○姓は通常最初の一語；西洋式に姓を最後に書いていることが判別できる場合，英語の人名のように扱う；名は通常2語からなるが，それらはハイフンでつなぐかつなげて書く
例） Lee Hon-Ling は Lee, H.-L. に
■タイ人名
○姓は最後の要素
例） Nguyen Lam Tiep は Tiep, N. L. に
■アラブ・エジプト人名
○姓は最後の要素
例） Hassan Fahmy Khalil は Lhalil, H. F. に
○接頭辞（el, ibn, abdel, abdul, abdoul, abu, abou, aboul）が姓につく場合，姓とハイフンでつなげる
例） Aziz Ibn Saud は Ibn-Saud, A. に

英文中で3つ以上の要素を列記する際，「A, B, C, and D」のように最後から2つ目の要素の後にカンマをつけても，あるいは「A, B, C and D」のようにつけなくてもどちらでもかまわない，とされる．とは言え勿論そのスタイルはまとまりのある文章の中ではどちらか一方で統一されるべきである．然るに本会英文誌に掲載される論文においては，論文の著者が3名以上の場合（論文タイトルページだけでなく引用文献リスト中でも）後者のカンマなしのスタイルであるのに対し，論文の本文中では前者のようにカンマありが一般的のような気がする．前者のスタイルの方が意味的な混乱を避けやすいため，技術文書 technical writing の指南書の多くはこちらを推奨している．ところで，自分が編集主幹であった時には，この二重ルールにもひょっとすると何か特別な意味（というか伝統？）があるのかな，と思い込んでおり，結局そのまま手を付けなかった．ところが最近その名前が一語であるインドネシア人研究者が終わりから2番目の著者である論文を見て，「意味的な混乱」というほどではないにせよ，どうにも据わりが悪い印象を受けた．Species Diversity の著者名表記も前者のようにカンマありのスタイルで統一しませんか？――というのが己の不作為への反省を踏まえた上での現・編集主幹並びに会員の皆様への提案なのだが，いかがなものだろうか．「たかがカンマの1つや2つに何をそんな」と思う向きも多いかもしれませんが……．

これから論文を書く方々に最後に申し上げたいのは，初めての論文を書き始める前に上に書いたような「暗黙のルール」を全て憶えようなどとはゆめ企てるべきではない，ということである．とにかくまずは書いてみて，時に間違いをやらかし，時に恥ずかしい思いもしつつ，必要に応じて徐々にそのような「ルール」を学び，身に付けて行けばそれでよいのではないか，と思う次第である．

柁原　宏（北海道大学理学研究院）